

神宮と伊勢のまちを伝える

O I S E S A N N E W S

お伊勢さんニュース

伊勢文化舎／〒516-0008 三重県伊勢市船江 2-22-25 TEL 0596-23-5166 FAX 0596-23-5241 E-mail otayori@isebito.com

第7号

7

●企画・発行 伊勢文化舎
●発行日 令和8年8月1日
●発行部数 55,000部
●協力 神宮司庁
神社本庁
近畿日本鉄道(株)
伊勢御遷宮委員会
伊勢のお木曳行事調査団
伊勢志摩観光コンベンション機構

目次

- 2面 春の伊勢にエンヤ!の音が響く
御木曳初式(役木曳)
3面 造宮の始まりを告げる木造始祭
あつい思いと誇りを胸に
4・5面 第63回ご遷宮 お木曳行事
陸曳行われる
6面 神宮植樹祭、御遷宮のカタチ「2」
お木曳行事入門講座 其の四
7面 内宮への奉曳は五十鈴川を川曳で
伊勢志摩のまつり暦・ご案内
8面

伊勢のお木曳行事始まる

町に響く「エンヤ!」の声、

次世代へ繋ぐ伝統文化

御造宮の幕開けを告げる

「御木曳初式」と「木造始祭」

伊勢の町衆が二十年待った

「お木曳行事」

御木曳初式 外宮鎮陸曳(小川町勢勇団)

第六十三回神宮式年遷宮(令和十五年予定)に向けた準備が、大きな節目を迎えた。令和八年四月、社殿造宮の始まりを実感する諸行事が相次いで行われた。

二十年に一度の役木が神域へ――

「御木曳初式(役木曳)」は、二年間にわたって行われる伊勢の民俗行事・お木曳の幕開けとなる儀式。御正宮の垂木や別宮の棟持柱といった重要な部位に用いられる役木を神域へと曳き入れる。奉仕者たちが息を合わせ、厳かな空気の中で御木を曳く姿は、遷宮行事への矜持と神宮へ無事に納めるという気概に満ちていた。

匠の技と祈りの結実――役木が神域に整うと、次は社殿造宮の本格的な始まりを神に告げる「木造始祭」を斎行。これは建築の守護神である屋船大神に御造宮の安全と新宮が清く美しく完成することを祈る。この祭儀を境に、ヒノキの御料木が神の尊いお住まいへと姿を変え始める。

町衆の誇りを次世代へ――五月からは一般のご用材を選び入れる民俗行事「お木曳」が町を挙げて始まった。かつての神領民による労働と奉仕の心をルーツとするこの行事は、お白石持行事と並んで今や伊勢に住む人々の最大の誇りであり、全国の崇敬者も参加する伝統文化だ。

毎週毎週、喜びに満ちたそれぞれの奉曳団の群像に、これほどまでに皆が待ち望んでいたのかと、驚かされた。ご遷宮行事のたすきを繋いで受け取る人々に、来年も、また二十年後にも期待が持てた。

(文・中村元美、写真・鈴木和宏)

春の伊勢にエンヤ!の音が響く

御木曳初式（役木曳）

お木曳がはじまる——伊勢の人々は躍る心を静めて、まず「御木曳初式」に臨んだ。御正宮や別宮の垂木（屋根の一部）など大切な部材となる、役木を、ゆかりの団がソリや車で曳き、また皆で担いで運び込む。敬虔な喜びとともに。

五十鈴川に法螺貝とエンヤの音が響く

河畔の桜が散り、新緑が芽吹き始めた四月十二日。お木曳の幕開けとなる御木曳初式の川曳が行われた。内宮と縁ある町の奉曳団が、御用材をソリに載せ、五十鈴川を約一・三キロ遡った。

当日は快晴。朝七時、神宮

から各団に御木が引き渡され、御正宮をはじめ荒祭宮、風日祈宮、月読宮、倭姫宮の御用材十本が八つのソリに積み込まれた。今回曳かれるのは正宮・別宮の棟持柱や垂木などになる材だ。大きさは長さ五〜六メートル、直径約四十センチ。地元奉曳団によつてしっかりと荷締めされると、八時五十分、一番木が

静かに川に下ろされた。一番木の奉曳を担う宇治・二軒茶屋地区の人々も川へ入る。朝はまだ寒さが残り水温も冷たかったが木遣り唄の合図で「エンヤー」と威勢よく出発した。

普段は静かな五十鈴川に法螺貝の音色、町々の木遣り唄、エンヤのかけ声が響く。木遣りの采が風にたなびき、揃いの法被で水しぶきをあげて進む住民らの表情はみな晴れやかだ。

いよいよ神域へと

宇治橋をくぐると御木は御手洗場で曳き揚げられ、神宮式年造営庁の職員によつて奉迎された。神職により祓

いよいよ神域へと
宇治橋をくぐると御木は御手洗場で曳き揚げられ、神宮式年造営庁の職員によつて奉迎された。神職により祓

宮（志摩市）と瀧原宮（大紀町）でも地元民らによるお木曳が行われ、それぞれ二台ずつの奉曳車によつて御用材が納められた。

“どんでん”や“練り”賑やかに

四月十三日。宮川のはとり、度会橋東詰め付近は早朝からにぎわい、終日伊勢の中心部に木遣り唄やエンヤの音が賑やかに響いた。この日、御木曳初式の陸曳が行われ、外宮の御正宮に三本、多賀宮、土宮、月夜見宮、風宮の四つの別宮に一本ずつの役木が運び込まれた。

陸曳は宮川から外宮に向かう。役木を曳ける喜びが弾けるかのように、人々は宮川から曳き上げた役木を堤防の坂の上に曳き上げ、勢いよく揺さぶつて水を切る「どんでん」を繰り返す。やがて「エンヤー」の掛け声とともに、坂を駆け下り、奉曳車に向かう。積み込みを終え、荷締めや飾り付けを施された役木は、いずれもまさに威風堂々。春の日差しを浴びながら、朗々と声をあげる木遣りに応え、皆で綱を振る「練り」を繰り返しながら、伊勢のまちの中心部を楽しくにぎやかに進み、エンヤの音があふれた。

内宮 川曳 四月十二日
外宮 陸曳 四月十三日

神域内は肅々と

外宮北御門に着き、神域に入る前には役木に付けた飾りを手際よく取り去り、曳き手は鉢巻を外し、「ご神事やから」と私語も謹んで肅々と静かに曳き込む。奉曳車のワン鳴りだけが神域に響く。北御門を入ったところで、神職たちが並んで出迎えてくれるのも、役木曳ならではの光景だ。

御正宮の役木を載せた三台



別宮には皆で担ぎ入れる



神域では飾りを外して進む

【内宮領 川曳】

内宮御正宮、荒祭宮、風日祈宮、月読宮、倭姫宮

宇治奉曳団・二軒茶屋奉曳団／伊勢古市奉曳団・桜木町奉曳団・中之町奉曳団・桜が丘奉曳団・五十鈴ヶ丘奉曳団／鹿海町奉曳団・中村町奉曳団・楠部町奉曳団・一宇田町奉曳団・朝熊町奉曳団／松下奉曳団・清渚連・茶屋清渚連・三津奉曳団・山田原奉曳団・溝口奉曳団・光の街奉曳団／大湊奉曳団

【外宮領 陸曳】

外宮御正宮、多賀宮、土宮、月夜見宮、風宮

小川町勢勇団・河崎南側奉曳団・河崎町旭通奉曳団・中島豊流団・本町奉曳団・出雲町誠義会奉曳団・京町親友会・八日市場町篤友会・河崎六ヶ町奉曳団



御正宮の役木は、大梃子と綱で大庭に降ろす

明治13年(1880)、明治天皇の御聖断を仰ぎ、伊勢神宮の遥拝所として建てられたのが「東京皇大神宮遥拝殿」、いまの東京大神宮です。皇室の御祖神である天照大御神をまつり、国民の総氏神と仰がれる伊勢神宮(内宮)の御神徳を皇都東京にあまねく宣布し、都民の心のよりどころとなるようにとの願いから創建され、140年余の歳月が流れました。「東京のお伊勢さま」東京大神宮は、いまも伊勢神宮と都民の心を結んでおります。



東京のお伊勢さま



東京大神宮

〒102-0071 東京都千代田区富士見 2-4-1
電話 (03) 3262-3566 FAX (03) 3261-4147
<https://www.tokyodaijingu.or.jp/>

JR総武線、地下鉄東西線・有楽町線・南北線・大江戸線
「飯田橋駅」徒歩5分

造営の始まりを告げる

木造始祭

四月二十一日

令和十五年（二〇三三）、秋に執り行われる予定の神宮式年遷宮。その八年前から約三十もの祭典や行事が重ねられ準備が進む。その中で社殿の造営が本格的に始まることを告げる祭典が「木造始祭」だ。

木造始祭は、建物の守護神である屋船大神に、御正殿が清く美しく造り奉られることと造営作業の安全を祈る神事だ。式年遷宮における造営工程の始まりにあたり、祭典の日時は天皇陛下によって定められる御治定（ごじじよう）を仰ぐ習わしとなっている。四月二十一日、内宮と外宮で厳かに木造始祭が営まれ、新しい御殿の建築がいよいよ始まった。

造営の安全を願い、 宮大工の所作に 祈りを込める

早朝、小雨が神域の緑を濡らした内宮で、御木曳初式で運び込まれた御料木三本が五丈殿前の静けさの中に並んでいる。祭場にはテントが立ち、午前七時、久邇朝尊神宮大宮司をはじめ、白い斎服の神職や青い素襖（すおう）に烏帽子（えぼし）を付けた



9人の小工が揃って御料木に手斧を振り下ろす（外宮）

その後、社殿造営に携わる技師や忌鍛冶（いみかじ）、小工が主役となつて、木取りの所作を披露。用材を加工する宮大工の伝統的な作法が、そのまま再現される。まずは御料木の両木口を鋸（のこぎり）で切り揃え、次に直線を引くために墨壺（すみづぼ）と曲尺（さしがね）を用いて墨を打つ所作をする。寸分の狂いもない造営のための第一歩となる仕草だ。続いて技師、技師、そして小工が順番に、御料木の前で手斧（てあな）を左・右・中とゆつくりと振り下ろして祭典は滞りなく終了。手斧の作業は材を削り始める象徴となり、木造始祭は、別名「手斧始（てあなはじ）」や「事始神事（ことのはじかみ）」とも呼ばれている。その所作を鷹司尚武（たかつかみ）・神社



造営庁側の技師による手斧の所作（内宮）

青空の下、 緑の森で手斧が 打ち振るわれる

正午、雨上がりの外宮の祭儀では、まず屋船大神に祝詞

本庁統理ら参列者が見守り、参道では多くの参拝者が足を止め、息を呑んで動作の一つ一つを目で追っていた。



（左から）物忌の川越おとさん、北川陽大さん、西本葵さん



神職が祝詞奏上（荒祭宮）、五丈殿での饗膳の儀（内宮）

ら二十八日にかけて、十四の別宮でも木造始祭が行われた。内宮・外宮の祭儀に準じて、御料木の安置されたそれぞれの別宮の御敷地（みきち）で屋船大神に祈りが捧

を捧げ、木取りの所作が行われた後に、饗膳の儀が営まれた。外宮では鋸（のこぎり）での切り揃えと墨打ち（すみうち）は行われず、手斧を打ち振るう所作のみに集中。物忌は童女の川越おとさんが一人で奉仕した。

この祭典を境に、これまで木を伐り出して運ぶという「山づくり」から、実際に社殿を造る作業が本格化。遷宮諸祭は宮大工である小工の技の領域「庭づくり」へと移る。取材・文中村元美、撮影 鈴木和宏

再び木曽の山で

約一年振りの長野県上松町の小川入国有林。木曽川へつながる支流に沿って歩き、「仮御樋代木伐採式」の祭場へと向かった。

仮御樋代木伐採式

五月十七日

祭場となった山に、高さ二十六メートル、直径六十センチ、樹齢約三百年の木曽ヒノキ。これが御神体を正殿から新しい社殿へと遷す際に用いる器「仮御樋代」の御料木だ。この奉伐を任されたのは、木曽の林業関係者でつくる「三ツ紐伐り保存会」の杣夫（さま）七人。太一と記された白いヘルメットを被る。

作業の安全を祈念して祝詞が奏上された後、伝統の伐倒技法



「三ツ緒伐り」で約一時間、杣夫が交代で三方向から斧を入れた。伐採式には、全国の神社関係者ら約百五十人が参列し、地元上松小・中学校の児童生徒約八十人もこの迫力の様子を見守った。次の上松での遷宮行事は十九年後だ。杣夫たちの思いはすでに、木曽での伐倒技法継承へ向けられていた。



伊勢名物 赤福

本店 〒516-0025 伊勢市宇治中之切町26番地
電話 0596-22-2154(代) ファックス 0120-081-381
<https://www.akafuku.co.jp>

お か び き 陸曳 行われる

第63回ご遷宮

昔、遠くの山々から海を経て宮川^{みやがわ}を遡^{さかのぼ}ってきたご用材。これをお木曳車に載せて、外宮領に住む人々が神域まで運んだ。今ではその形を守りつつ、各団がご用材を曳く、お木曳行事の陸曳となっている。

初夏、第一次お木曳行事の陸曳が週末ごとに行われた。参加は、内宮に御扉木^{みひらぎ}を奉曳^{ほうえい}する磯町^{いそちょう}を含め五十三団。団の法被^{はっぴ}に神領民^{しんりょうみん}の気概^{きがい}を込めて、誇り高く、神宮へのあつい心を込めて、エンヤ!とご用材を曳いた。



小川町のお木曳車。堂々たる奉曳

小川町勢勇団

五月九日、出雲町誠義会奉曳団から始まった陸曳は、六月十三日の一之木町須原奉曳団をもつて幕を閉じた。色とりどりの法被と同じように、それぞれの団に歴史と物語があり、奉曳にも個性がある。ここでは五月十日の小川町勢勇団を中心に陸曳の流れを追おう。

外宮とのゆかり深く

小川町は現在はない町名で、宮川右岸、度会橋に近い中島二丁目付近の名称だった。神宮と縁の深い伝統のある団で、御木曳初式^{おきじめしき}の一番車や第二次お木曳で外宮棟持柱^{とけもちしら}を曳く「特権」を持つ。また材木商が多かったため、ご用材を管理する宮川関場組合^{みやがわかんばあひ}とも密接に関わっている。

他の団と同じく、木遣りや荷締め^{にじ}の稽古^{きこ}にはじまり、奉曳車の調整、二見興玉神社^{ふたみこうたま}で無垢塩草^{むくしおぐさ}のお祓い^{はらい}を受ける浜参宮^{はまさんみや}、出発地点まで奉曳車を運ぶ上せ車^{のぼり}などの準備や行事を経てこの日を迎えた。団員数が減少する中、全国から応援の曳き子を迎え、八百人を超える堂々の大奉曳となった。

古儀を残す

水切り どんでん

十日早朝、関場組合でご用材を受け取り、川へ。古に倣い、ソリに載せたご用材を水中で曳き回し、どんでん場に曳き上げて、激しく前後を上下させて水を切る。朝日を受け、どんでん場のご用材は輝くばかり。晴れ

勇壮に水を切る「どんでん」
(神久社奉曳団)

木遣りはお木曳の華

出発直前、奉曳車の木遣り台に、二人の男性が上った。陣笠をか



1月に行われた「三町固めの儀」



外宮北御門へと到着した小川町

がましい一日の始まりだ。

水切りの後、ソリは坂を滑り降り、お木曳車へ。ご用材を移し替え、荷締めを行う。この団の荷締めは、速く美しいと評判。町名を書いた大きな絵符や幟^{えふ}で飾ると勇壮な奉曳車が出来上がり、出発を待つばかりとなる。明治時代から兄弟団である船江神習組奉曳団^{ふねえがしんしゅうぐみ}、一之木町須原奉曳団^{いちのきちょうすげん}も駆けつけている。

幅広の道に入ると、木遣り子たちが大きな声でリードして綱を左右上下に振る「練り」を行い、綱に挟まれた木遣り子がびよんびよん跳ぶなどの遊びを入れて楽しみながら進んで行く。奉曳車の車軸がこすれて、法螺貝^{はらがひ}のような音を立てる「ワン鳴り」も好調に響いている。

休憩地点では子どもたちや兄弟団の木遣りが披露される。他団で



- ① 浜参宮（八日市場町篤友会）
- ② 上せ車にはねぶたの飾りも（宮後奉曳団）
- ③ 関場から宮川に出発！
- ④ 貯木池にご用材を納める（出雲町誠義会奉曳団）
- ⑤ 「練り」は楽しく（宮川町奉曳団）



ご用材を貯木池に

は女性部による伊勢音頭や道唄^{みちうた}などが華やきを添えることも多い。

ゆつたり歩いて外宮北御門^{きたみかど}へ曳き込むと、最後の本木遣り。外宮の緑を背景に唄う姿と声は人々の心に沁み入るようだ。大きな拍手のあと、飾りを外した奉曳車を山田工作場の貯木池のほとりまで静かに曳き込む。

副団長で梶子方^{かたが}も率いる長谷川裕紀さん（66）が最後の綱をほどき、エンヤ!の掛け声とともにご用材を池に納め、小川町勢勇団の奉曳が終わった。盛大な奉曳に団長の平生秀彦さん（68）は「皆さんのおかげです。少ない人数で、団員全員が頑張ってくれましたし、兄弟団の皆さんはじめたくさんの方々を力貸してくれて……」と目を潤ませる。皆がまごころを重ねてこぞできたお木曳だった。

来年、第二次お木曳では、どんな奉曳が見られるだろうか。



名物 岩戸餅

お多福とともに
岩戸屋は
今も昔も肉宮前



伊勢・内宮前おはらい町



岩戸屋

TEL 0596・23・3188
FAX 0596・28・1322

豆腐庵山中

伊勢市宇治中之切町 95 番地
電話 0596・23・5558 木曜定休

全国から集まった 特別神領民

熱気と感動に
包まれた
14日間



奉曳、
お疲れ様でした！

地元、お疲れ様でした！
地元の奉曳団が週末の伊勢を彩る中、もう一つ注目を集めたのが、全国の崇敬者による「特別神領民」。お木曳期間中の金・土・日曜に繰り広げられ、計二万人が参加した。奉曳前日には二見浦での「浜参宮」で、地元住民と同じように心身を清めて行事に臨む。

当日は、白い法被に身を包んで綱を手にし、町衆や伊勢神宮奉仕会青年部の木遣り唄を聞き、沿道からの温かい拍手や声援を受け、一步一步、力強く奉曳車を外宮へと曳き進める。次第に表情ははじける笑顔となり、エンヤ！の掛け声も高らかに。参加者も、奉曳やおもてなし広場などで支



1日2台の奉曳車で約1600人が参加

えたボランティアスタッフも、全員の心が白い綱で通い合う瞬間だった。



あつい思いと誇りを胸に

お木曳行事

河崎南側奉曳団 河崎町旭通奉曳団の合同奉曳

少子高齢化や人口減少が進む中、多くの奉曳団がその存続やあり方を模索している。

二年次には旭通のものを使用する予定だ。

かつて勢田川の水運を活かして栄えた河崎。川を挟んで、左岸の河崎一丁目界隈が旭通、右岸が南側だ。合同の話が出たのは団結成時の令和七年一月頃。青年団の結成が難しくなった南側が、旭通に打診したのがきっかけだ。両団はもとも役木曳で合同奉曳する「友好団」という関係にあり、スムーズに話がまとまった。

伝統を受け継ぎ
新しいカタチへ

南側と旭通は互いに受け継いできたものを残しながら一緒に奉曳しようという形を選び、団名は「合同奉曳」という形を選び、団長や役員組織もそれぞれに独立。法被も団で、木遣り唄も各団伝統のものを披露する。奉曳車にはそれぞれの団名が記された絵符と幟、飾り提灯を片側ずつに載せた。車は一年次に南側のものを、



梶子方の法被もそれぞれに

なく晴れやかな表情で奉曳する姿を見て、旭通団長の美濃松謙さん（54）も「同じ河崎町といえど、深くは知らない

陸曳あれこれ

①磯町慶光院奉曳団

御屏木を宮川のほとりから
内宮へ九キロ

磯町の法被にあしらわれているのは、慶光院家の家紋「蟹牡丹」。内宮正殿の御屏木を運ぶお木曳は「慶光院曳」と呼ばれ、その栄誉を任される由縁は戦国時代に遡る。世の混乱によって途絶えていたご遷宮の復興を成し遂げたのが、五人の慶光院上人だ。その功績を称え、文禄三年（一五九四）に豊臣秀吉から慶光院へ磯村（磯町）の領地が与えられたという。

宮川左岸の河口にある磯町は世帯数百五十ほどの町だが、奉曳団本部を二年前に結成し準備を進め、当日は神宮をはじめ慶光院家、霧島神宮、東京大神宮と全国から約千八百

人が多い。合同にしたことで町民同士の交流も深まり、よかった」と語った。

人が集まった。

早朝六時、宮川のほとりを出発し、外宮前を通って、市役所前で式典。神宮徴古館で昼食をとり、夕方五時ごろ内宮宇治橋前に到着し、おほらい町を進み、国道で五十鈴川に架かる浦田橋をエンヤ曳。薄暗くなった宇治工作所へ無事御用材を納めた。

②川端町天漁人奉曳団

上せ車と帰り車は
宮川に架かる度会橋で

宮川左岸にある川端町は、かつて伊勢参りの旅人が川を渡った「柳の渡し」として栄えた場所。そして目の前を流れる清流で獲れる鮎を、神饌として神宮に献上する役割を担ってきた。団名の「天漁人」は、鮎奉納の歴史を伝える由緒ある称号で、法被は鮎を図柄にしている。

奉曳前日の上せ車を飾るのも、鮎漁と柳の渡しを描いた大きな飾り行灯だ。度会橋を練るのも川端町ならではの真ん中二車線を利用し、みなでエンヤの掛け声を絶やさず、法被と飾り行灯で町の風情を伝え、中島の出発地点へと運



④内宮宇治橋前に到着した慶光院曳



③磯町の綱の長さは片側約400メートル（宇治浦田付近）



②川端町天漁人奉曳団の北御門へのエンヤ曳と飾り行灯を載せた上せ車



①川端町天漁人奉曳団の北御門へのエンヤ曳と飾り行灯を載せた上せ車

*ご用材の表記について——神宮の祭典や行事では「御用材」を使用し、一般曳のお木曳行事には「ご用材」を使用します。

伊勢鳥羽
みちくさきっぷ
1DAY
2DAYS
ワイド

伊勢鳥羽方面へお出かけの際は、
観光施設割引がついた乗り降り
自由なバスフリーきっぷで！

フリー乗降区間や発売場所は
HPをご覧ください！

三重交通

〒514-8635 津市中央1番1号 TEL.059-229-5533
URL. <https://www.sanco.co.jp/>

ゆとりとやすらぎの宿
神宮会館
一般財団法人 伊勢神宮崇敬会

好評販売中
お木曳チヨロQ
1,300円(税込)

ご購入はこちら

<https://jingukaikan.shop/>

年	月	諸祭・行事	祭典・行事の趣旨
令和7年 (2025)	5月	山口祭○	内宮は神路山、外宮は高倉山の麓の祭場で、御 杣山の口に坐す神を祀る
	5月	木本祭○	心御柱の御料木を伐採する深夜の秘儀
	6月	御杣始祭・裏木曾 御用材伐採式	長野県・岐阜県の御杣山で、御神体をお納めす る御樋代木を伐採する祭儀
	6月	御樋代木奉曳式	御樋代木を内宮及び外宮の宮域に曳き込む行事
	9月	御船代祭○	御樋代をお納めする御船代の御神木を伐採する祭り
令和8年 (2026)	4月	御木曳初式	代表的な御用材を、町の人々が神域に曳き込む
	4月	木造始祭○	御造営の作業を始めるに当たり作業の安全を祈る
	5～8月	御木曳行事（第1次）	伊勢の市民や全国の崇敬者が、ご用材を宮域内 に曳き入れる行事
	5月	仮御樋代木伐採式	遷御に際しての仮御樋代のご料木を伐採する祭り
令和9年 (2027)	5～8月	御木曳行事（第2次）	第一次と同じ
令和10年 (2028)	4月	鎮地祭○	新御敷地での最初の祭儀で、大宮地に坐す神を 祀る祭り
令和11年 (2029)	11月	宇治橋渡儀式	新たに掛け替えられた宇治橋を、渡女を先頭に 3世代揃いの夫婦が渡る行事
令和14年 (2032)	3月	立柱祭○	建物の平安を祈り、御正殿に立てられた御柱を 小工が打ち固める祭り
	3月	御形祭	御正殿の妻の短柱に御形を穿つ秘儀
	3月	上棟祭○	御正殿の御棟木を奉揚する祭り。神職らが御棟 木を掲げ、小工が打ち固める
	5月	檐付祭	新殿の御屋根に萱を葺きはじめる祭り
	7月	薨祭	新殿の御屋根を葺き終え、御金物を奉飾する祭り
令和15年 (2033)	7～9月	御白石持行事	新宮の御敷地に、伊勢の市民と特別神領民が御 白石を奉献する行事
	9月	御戸祭	新殿の御扉に御鑰の穴を穿つ祭り
	9月	御船代奉納式	東宝殿内で御船代を奉彫し御正殿内に奉納する
	9月	洗清	新殿の竣工に伴い、殿の内外を洗い清める儀式
	9月	心御柱奉建	忌柱、天御量柱とも呼ばれる御柱を奉建する
	9月	杵築祭○	新殿の竣工を祝し、御正殿の御柱を築き固める
	10月	後鎮祭○	神殿の竣工に際し、大宮地の平安を祈り神殿の 床下に天平釜を奉献する祭り
	10月	御装束神宝読合	新たに調進された御料を式目に照らし読み合わせる
	10月	川原大祓	遷御前日、奉遷御料や御装束神宝、遷御奉仕員 を川原祓所で祓い清める儀式
	10月	御飾	遷御当日、新調された御装束で殿内を飾る儀式
	10月	遷御○	御正宮より新宮へ大御神にお遷りいただく、遷宮 の中核となる祭り
	10月	大御饗	遷御翌朝、新殿において初めて大御饗を奉る祭り
	10月	奉幣○	天皇陛下より奉られる幣帛を奉納する祭り
	10月	古物渡	古殿の御物を新宮へお移しする儀式
	10月	御神楽御饗	奉幣の夕、御神楽に先立ち大御饗を奉る祭り
	10月	御神楽○	宮内庁の楽師により、秘曲を含む御神楽を奉奏

第六十三回式年遷宮主要諸祭・行事予定

＊○印は日時に天皇陛下の御治定を仰ぐ祭り ＊年月は前回遷宮の例による

（取材・文 中村元美）



祭場は鼻突谷にある0.2ヘクタールの斜面

令和七年十一月十八日、内宮の南側に広がる宮域林において、遷宮用材を育てるための神宮植樹祭が行われた。

この植樹祭は昭和二十五年から続く行事で、例年は春に行われている。令和七年は遷

宮行事により、爽やかな秋の日に執り行われた。午前十時、内宮から車を走らせて辿り着いた神路山の斜面において、久邇朝尊神宮大宮司をはじめ、神宮職員、崇敬会職員ら約七十人が参列。山の神への祝詞が奏上され、神と御塩で祭場が清められた後、約六百本のヒノキの苗木を手分けして一本ずつ丁寧に植えた。

山の自給自足への歩み

今回植えられたのは、神宮の森で採取されたヒノキの種を、伊勢市佐八町にある苗場で育てた三年生の苗木が、正殿の柱となるような直径六十センチの大径木に育つのは、およそ二百年後のこと。神宮営林部では、ヒノキを植えてから二十年間は下草刈りや枝打ちを欠かさず、さらに適切な間伐を行うことで、まっすぐで質の良い御用材を育てている。



植樹の前に作業の安全を祈る



大木を願って一本ずつ植える

御遷宮の森レポート

神宮植樹祭

第六十三回式年遷宮に向けた山つくりの諸祭が続いた昨年の秋、二百年後の大樹を願い、神宮職員がヒノキを植樹した。

御遷宮のカタチ 2

御木曳行事の歴史について

神宮司庁 広報室 提筆 菅人



外宮北御門へ到着した奉曳車

昨年の山口祭を皮切りに始まりました第六十三回神宮式年遷宮の諸祭諸行事は、順調に執り進めており、本年は神領民（伊勢市民）と全国崇敬者の特別神領民により御用材を両宮域内に曳き入れる御木曳行事（第一次）があります。

豊受大神宮（外宮）では五月九日（土）から六月十三日（土）。皇大神宮（内宮）では七月二十五日（土）から八月二日（日）までです。

神領民による御木曳の初見とされる史料に、室町時代の欄宜藤波氏経が記した『寛正三年造内宮記』があります。寛正三年（一四六二）皇大神宮正遷宮（第四十回）を記録した史料で、享徳二年（一四五三）二月二十八日の条に、宇治郷の人々に

御木曳行事には全国崇敬者に特別神領民として奉仕いただいており、神領民（伊勢市民）と力を結集し行われます。時代が変わっても、伊勢市民にとって御木曳行事は一生のうちに数回しかない大切な行事であり、御木曳を町ごとで担う心意気は現在も受け継がれています。

御木曳の初見とされる史料に、室町時代の欄宜藤波氏経が記した『寛正三年造内宮記』があります。寛正三年（一四六二）皇大神宮正遷宮（第四十回）を記録した史料で、享徳二年（一四五三）二月二十八日の条に、宇治郷の人々に



綱の真ん中で采を持つ木遣り衆

私の旅行スタイル、ふるさと納税。

鳥羽市ふるさと納税

検索

鳥羽に旅行するなら「宿泊観光周遊券」が絶対お得！
寄附金額の3割分の宿泊観光周遊券をお贈りします。

鳥羽市観光協会



伊勢志摩観光の拠点に

鳥羽湾の絶景を望む
湯めぐりリゾートホテル



〒517-0021
三重県鳥羽市安楽島町 1084
☎ 予約専用 0599-25-8181



令和八年第一次お木曳行事 入門講座 其の四

内宮への奉曳は

五十鈴川を川曳で

文 山中一孝（伊勢市観光協会副会長）

伊勢が盛り上がるお木曳行事。春に陸曳が始まり、川曳の季節となった。その特徴と見どころを紹介する。

現在の川曳は五十鈴川の三重交通Gスポーツの杜伊勢体育館横をスタート地点とする。明治の頃までご用材は木曾より水運により運ばれて五十鈴川河口の大湊に集められた。そこより川を遡り、鹿海・楠部などで貯木をしながら奉曳されたのであるが、今はトラック等で神域まで直に運ばれる。近代化により輸送手段が変わり、実労働ではなくなったのである。現代のお木曳はご用材をお借りして父祖の行ってきた奉曳という文化を継承しようというものが、それでも木の浮力を生かして川の中を神域へと曳いていく様は他に例を見ないのであり、見どころも多い。

かつては大湊から水運で内宮へ

式年遷宮のためのご用材を皇大神宮（内宮）に曳き込むのが、お木曳の「川曳」である。内宮は神域内まで五十鈴川の水運が使えるので、豊受大神宮（外宮）の「陸曳」のような奉曳車に乗せて町中を曳くという華やかさはないが、自然の川の中で繰り広げられる奉曳は独特の異彩を放っているといえよう。その川曳コースの見どころを少し紹介しよう。



[上] 古市町の川曳。戦中ほどの団も白い衣装で揃えてお木を運んだ（古市町提供）
[左] 丸大マークが神宮とのゆかりの深い楠部町。「大」の字を記した幟がそれを物語る（楠部町提供）



五十鈴川を遡り、おはらい町のまち並みに沿って進む川曳。ソリにご用材を載せ、川底を滑らせるようにして曳いていく（令和8年4月役木曳の様子）

お木曳事典

①ソリ

かつてはご用材に直に綱を付けての川曳であったが、戦後の奉曳より使用されるようになった。ご用材を川底などで傷めなためである。

②木遣り

川曳の木遣りはシンプルで力強い労働歌の風情を残している。各団の郷土自慢を詠んだ歌



木遣りが持つ采は木製

詞やフシまわしの違いなど聞き所も多い。

③法螺貝

川曳のみで使用される。陸曳の団で使用しないのは奉曳車のワン鳴りの音に通じるからとも考えられる。木遣りの始まりや勢いをつける時に吹かれる。



④エンヤ曳

宇治橋下で陸に曳き上げる際や堰を越える時など曳き手の力を一つにして難所を一気に乗り越える曳き方をいう。

⑤神域内作法

五十鈴川から宇治橋下手を内宮神域内に曳き上げた後は木遣り唄は禁止。また幟を立てて歩くのは火除橋まで黙認されている場合が多い。

水しぶきをあげて五十鈴川を遡る

体育館横をスタートし、浦田橋、新橋をくぐって上流へ進んでいく。神路山が近づいてくるこの景色は遠い祖先も川の中からみたであろう景色であり心踊るものがある。

川風に幟がひらめき、法螺が鳴り、木遣り唄が聞こえる。各町の法被も誇らしく五十鈴川を進む姿は江戸の昔もかくあるうか、という風情であり、可能な方はぜひ現地でご覧いただきたい。水しぶきをあげて曳き手が川の中で練るのを見るのは川曳ならではの。また、橋の下をご用材が通る時は橋の通行を禁止している。

烏帽子岩の上流部と下流部に堰があり、団によってエンヤ曳をかける事がある。宇治橋をくぐって上流へ行くのは御樋代木と役木のみ。一般の奉曳は宇治橋下手を右岸側に曳き上げる。その際のエンヤ曳は木遣り一本で曳き上げる団が多く、見どころ聞きどころである。神域に入ると木遣りは唄わずに奉納場所へ進んで行き奉曳は終了。お木曳は時代によって姿を変えた所もあるが（旧）神領民の心意気は変わらないと信じている。

（やまなか かずよし）：三重県伊勢市生まれ。皇學館大学国史学科卒業。家業である土産物店に勤務のかたわら観光協会活動等にたずさわる。現在、（有）豆腐庵山中代表取締役（公社）伊勢市観光協会副会長。

伊勢のお木曳行事 調査団レポート ⑤

令和のお木曳の安全と成功を祈願 お木曳出初式

伊勢の民俗行事であるお木曳。令和八年四月四日の「お木曳出初式」で、その幕が開けた。「第六十三回神宮式年遷宮用材奉曳本部」と「奉曳団連合会」の役員約二百人が参加し、お木曳の無事と成功を祈った。



約200人が集まった式典

伊勢商工会議所での式典では、奉曳本部長である鈴木健一伊勢市長が「お木曳は、子ども、青年、高齢者がそれぞれ役割を持ち、力を合わせる機会。心を一つに合わせ、勇壮に曳ききってほしい」と挨拶。式典後は二見町で心身を清める「浜参宮」。揃いの白い法被姿で夫婦岩表参道を進み、二見興玉神社に到着すると、本殿で無垢塩草によるお祓いを受け、その後、内宮・外宮を参拝し、奉曳の安全と行事の成功を一同で祈願した。



清き渚・二見浦で浜参宮

お伊勢参りは
まず二見浦で浜参宮
心身清めて
お伊勢さんへ

御朱印帳



二見興玉神社

〒519-0602 三重県伊勢市二見町江 575
TEL 0596-43-2020

政府登録国際観光旅館 天保元年創業
上皇・上皇后両陛下 秋篠宮皇嗣同妃両殿下
ご宿泊の栄を賜りました。

鳥羽駅より徒歩3分
鳥羽湾の絶景を望む

伊勢志摩国立公園／鳥羽温泉郷

〒517-0011
三重県鳥羽市鳥羽一丁目24-26
☎0599-25-2500（代）

伊勢志摩のまつり暦

8月

1日(土)

外宮さんゆかたで千人お参り
五穀豊穡や無病息災を祈った「八朔参宮」の習わしを伝える行事。ゆかたで夏の夜の外宮を参拝する。
17時～21時 伊勢神宮外宮およびその周辺 伊勢神宮外宮およびその周辺 伊勢神宮外宮およびその周辺
TEL 090・3257・7674

4日(火) 風日折祭

農作物や五穀が風雨の恵みを受けて豊かに稔るよう御幣を捧げて祈る。
伊勢神宮外宮5時～ 内宮9時～ 伊勢神宮神宮司庁 TEL 0596・24・1111

17日(月)～18日(火)

佐瑠女神社例祭
芸能の神である天宇受売命がおまつりされている佐瑠女神社の例祭。
17日17時30分～、18日11時～ 舞台イベント17日18時30分頃(予定)
伊勢市、佐瑠女神社(猿田彦神社境内) 猿田彦神社 TEL 0596・22・2554

23日(日)

愛洲氏顕彰祭、剣祖祭
剣道の始祖、愛洲移香齋を偲び、日本各地や海外からも剣の達人が集まる。各流派演武者による迫力のある武芸が奉納される。
8時30分～ 南伊勢町五ヶ所浦五ヶ所城跡 愛洲の館 TEL 0599・66・2440

9月

3日(木) 拔穂祭

神嘗祭や緒祭典で神様に奉る御料米の稲穂を抜きとって収穫する神事。
伊勢市桶部町、神宮神田 伊勢神宮司庁 TEL 0596・24・1111

5日(土)

夫婦岩大注連縄張神事
木遣り唄が流れる中、氏子らによって大注連縄が新たに張り渡される神事。
10時～ 伊勢市、二見興玉神社 二見興玉神社 TEL 0596・43・2020

7日(月)

わらじ祭り(神事)
ダンダラボッチの民話に由来する祭り。豊漁と平穏無事を願い、波切神社での神事のあと須場の浜で2層の大きなわらじを海に流す。


10月

1日(木) 御酒殿祭

神嘗祭にお供える御料酒(白酒・黒酒・醴酒・清酒)がうるわしく醸成できるよう祈願し、全国の酒造業の繁栄を祈る祭り。
10時～ 伊勢市、伊勢神宮内宮御酒殿 伊勢神宮司庁 TEL 0596・24・1111

5日(月) 御塩殿祭

年中の諸祭典にお供える塩を焼く固める祭り。全国の塩業の発展を祈願する。
10時～ 伊勢市二見町、御塩殿神社 伊勢神宮司庁 TEL 0596・24・1111

10日(土)・11日(日) 伊勢まつり

「見て」「参加して」「楽しめる」をコンセプトにした、伊勢地域最大級の秋の恒例イベント。伊勢音頭や太鼓などのパレード、イベント広場のダンスや演奏、さらに手筒花火など多彩なプログラムが行われる。
10日～9時40分～21時、11日～9時40分～17時(時間は変更の可能性あり)
伊勢市、高柳商店街周辺、泉道鳥羽松阪線、伊勢市駅周辺 伊勢まつり実行委員会事務局(伊勢市市民交流課内) TEL 0596・21・5549

14日(水) 神御衣祭

神服・織機神社・神麻績織機神社で奉織された和妙(絹・荒妙(麻)の神御衣を奉る祭り。
伊勢市、12時～、荒祭宮、正宮に引き続き伊勢市、伊勢神宮内宮・荒祭宮 伊勢神宮司庁 TEL 0596・24・1111

15日(木)・25日(日) 神嘗祭

その年の新穀を神様にお供えし、豊穣に感謝する。一年間の神宮の祭りの中で最も重要な祭り。
17日12時～ 伊勢市、伊勢神宮外宮内宮ほか 伊勢神宮司庁 TEL 0596・24・1111

15日(木) 初穂曳(陸曳)

奉曳車にお初穂をのせ市内を奉曳し、外宮に奉納する行事。
伊勢市、高柳商店街(今社付近) 泉道22号、伊勢神宮外宮 伊勢神宮奉仕会事務局 TEL 0596・25・5154

16日(金) 初穂曳(川曳)

初穂船にお初穂をのせ五十鈴川を遡り、内宮に奉納する行事。
伊勢市、五十鈴川浦田橋付近、伊勢神宮内宮 伊勢神宮奉仕会事務局 TEL 0596・25・5154

※データは6月1日現在。まつりや行事は主催者側の都合により、変更又は中止になる場合がある。

ミュージアム情報

斎宮歴史博物館

開催中(8月23日(日))

夏季企画展「王朝文学と斎宮」

「源氏物語」などの王朝文学における斎宮・斎宮の姿、斎宮と文学の関わりを紹介する。
9月19日(土)・11月15日(日) 特別展「大斎院」

平安時代に生まれたもう一つの斎宮制度「賀茂斎院」世界を紹介する企画展。

多気郡明和町 9時30分～17時(入館は16時30分まで) 9月曜日(祝日の場合は翌日) TEL 0596・52・3800

神宮徴古館

8月2日(日)～10月7日(水)

第六十三回神宮式年遷宮特集展示
第62回式年遷宮の際に撤下された御装束・神宝の展示。
伊勢市神田久志本町 9時～16時30分(入館は16時まで) 9月曜日(祝日の場合は翌日) TEL 0596・22・1700

神宮美術館

開催中(11月4日(水))

令和7年度奉納・神宮式年遷宮奉賛美術品展
当代を代表する芸術家の方々から神宮に献納された美術工芸作品の展示。令和7年度奉納の新収蔵品を公開する。
伊勢市神田久志本町 9時～16時30分(入館は16時まで) 9月曜日(祝日の場合は翌日) TEL 0596・22・1700

鳥羽市立海の博物館

開催中(9月27日)

「魚、そして世界へ 山下丈夫展」
伊勢と東京で活躍した志摩市出身のデザイナー・山下丈夫氏の作品展。身近な生き物を描き、22歳の作品展に世界各地を訪れ、壁に魚の絵を描いて「世界壁画製作の旅」を実現。大胆で独特なタッチの作品が並ぶ。



開催中(11月1日(日))
企画展「伊勢湾・鳥羽の海洋ごみ」未来へ向けてできること」
伊勢湾周辺に漂流・漂着する海洋ごみの現状、環境保護のための事業者の取り組みなどを紹介し、環境への意識を高める企画展。

伊勢湾浦田町 9時～17時(3/11・30・入館は16時30分まで)
9月26日・30日、12月26日・30日 TEL 0599・32・6006

ご案内

令和9年新装版「伊勢の神宮カレンダー」

10月1日より販売予定



定価▷880円 発行▷伊勢神宮崇敬会

神宮司庁監修・編集のもと、神宮の美しい風景や祭典の様子など全7枚で綴られたカレンダーです。神宮参拝や日々の暮らしにご利用ください(祭典・諸行事の日程、六曜掲載)。

ご注文・お問合せ▷神宮会館
TEL 0596・22・0001 FAX 0596・22・1517

伊勢の新施設ご案内

伊勢市歴史博物館

令和8年4月開館
特別展「お木曳をまとうー法被に背負う地域の記憶ー」
開催中(9月6日(日))

伊勢の歴史文化を発信する新たな拠点としてオープン。伊勢参宮の歴史の変遷、伊勢の暮らしや祭りなどを実物資料や映像、体験展示を通して多角的に紹介する。お木曳に合わせた特別展では、市内奉曳団が羽織る法被の文様に着目。そこに刻まれた特徴や地域の歴史を案内している。



編集長雑感

「外宮さんやで恵みの雨やな」と見学者の誰かが言った。第一次陸曳も終盤に近い6月7日、午後は20ミリ近い雨量が予想されたが、宮後奉曳団の二連曳は諦めることなく、外宮北御門へと進んだ。互いに励まし合う声高らかに「寒いで動こか」と綱を上下に揺らし、子どもたちも綱から離れず、小さな体で力一杯エンヤを響かせた。応援に駆けつけた法被衆も雨に濡れながら声を出し続ける。居合わせた皆の想いは一つだった。(元美)

オカゲ屋敷

令和8年7月開館
「おかげさまの精神を次世代へ」
おかげさまの心をテーマにした体験型ミュージアムが、おかげ横丁に誕生。日常に潜む「感謝」をおもてなしの気持ちでかき生み出せる。オカゲサマから、日本の四季や文化、お伊勢参りの歴史、伊勢の暮らしを楽しむがら学ぼう。



次号は
令和8年10月下旬発行予定

スタッフ

発行人 中村賢一
編集長 中村元美
編集 堀口裕世 中川絵美子
出口伊都穂 福所淳子
撮影 鈴木和宏(アンブレ)
高木恵奈(アイブレーション)
印刷 大享印刷(株)



風に乗って
伊勢志摩へ

KINTETSU

近鉄特急なら
京都・大阪難波・名古屋から 乗換えなしで
伊勢 鳥羽 志摩へ

俳優・岡崎紗絵が行く、
観光特急「しまかぜ」
スペシャルサイト公開中!

